



北京で活躍するイン・インホンの、日本初個展である。インは今回、八点の油彩と二点の版画を展示した。《16歳》《夜猫》《秘密》等、何れも物語性を強調するタイトルが付せられている。しかし、この「物語」がどのように作用するかによって、作品の印象がガラリと変化する。

日本には、世界に類を見ない公募団体展が犇めき合っている。その理由とは当然のことながら、日本で初めての美術展が「文部省美術展覧会」(1907-18年)であり、この系譜は現在の日展にまで引き継がれている。文展に対し二科展が生まれ、美術文化、自由美術と後を追った。現在にどれほどの公募団体展があるのかは、ここでは異なる議論になるので言及を避けるが、いずれにせよ、公募団体展の特徴は徒弟制度が生き残り、「賞」を与える点にあると言える。

公募団体展以外に美術作品を発表出来る場が開けたのは、第一次アンデパンダン展全盛期を過ぎてからのことである。それは日本が高度経済成長期を迎えたことを意味する。無所属で活動する美術家が経済的に苦しいことは周知の事実だ。しかし無所属でも生き残っていけるのは、日本が資本主義であるからに他ならない。

無所属の美術家は、主に公募団体展に所属する作家と作品を軽視する。公募団体展が持つ「権威」とその小さな枠に安住する闘争心のなさを嫌悪するのだ。しかし公募団体展に所属する美術家の数は、日本の美術家の中で圧倒的に多い。公募団体展所属の美術家からすれば、無所属の美術家など「何処の馬の骨か判らない」と感じているのだろう。



一見、インの作品は「無難」に見える。しかしその詳細を追うと、驚くほどのテクニックを駆使し、非常に過酷な実験を行っていると言ったことが出来る。透徹したデッサンを繰り返したであろう人体像と圧倒的な筆が創り出す草陰に、幻想的なフィギアと動物が浮かび上がる。ここに描かれている世界とは、世界の共通言語であるモダニズム、シュルレアリズムを、どのように中国で消化し、昇華するのかといった思索が込められている。



それは同じアジアの中で、どのように見られる = 展開するかといった問題も孕んでいる。現在の日本の絵画市場は、公募団体展が持つ「権威」と無所属の作家が苦心して生み出した「実験」を混在させ、批評を必要としない天才志向に満ち溢れている。著名な作家ほど代表作がないことに、偉大な作家 = 偉大な作品と言う同義語が見え隠れする。

タイトルを含めたインが持つ分かり易さに陥らず、我々はインの作品そのものと対峙しなければならないのだ。

